

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 24 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23401042

研究課題名(和文) 自然災害からの創造的な復興の支援を目指す統合的な民族誌的研究

研究課題名(英文) Integrated ethnographic research for "creative reconstruction" from natural disaster

研究代表者

清水 展 (Shimizu, Hiromu)

京都大学・東南アジア研究所・教授

研究者番号：70126085

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、人類学者を中心とする学際的な共同研究を通じて、災害頻発地域であるアジア(日本を含む)の長期的な復興過程に関する統合的・多面的な民族誌的事例研究を行った。それによって、「創造的復興」という概念や、大矢根が「既定復興」と呼ぶ、日本の災害復興の制度の見直しを行った。日本においては歴史的に形成された公的制度によって、復興の大きな道筋が定められている。それは復興を円滑にしているようで、実際には様々な制約を加えている。本研究ではそのようにある意味で「当たり前」になってしまっている日本の復興の道筋を捉え直し、よりよい、あるいは多様な復興への道筋を示した。

研究成果の概要(英文)：This is an interdisciplinary collaborative research on disaster reconstruction process. Based on fieldwork in Pinatubo, the Philippines (Shimizu), Aceh, Indonesia (Yamamoto), Phuket, Thailand (Ichinosawa), Istanbul, Turkey (Kimura), Unzen (Oyane), Kobe (Terada), Ojiya (Shigekawa), Minamisanriku (Yamashita), and Canterbury, New Zealand (Otani), we observed the different trajectories of long-term reconstruction process and trials and errors made by local communities. Our research outcome enables us to revise critically the government-led procedure of disaster reconstruction in Japan. Since 1995 Hanshin-Awaji Earthquake, the linear procedure of reconstruction has been fixed by the official institutions. It makes the process smooth and efficient, however, simultaneously, it hides the resiliency and creativity of the people affected by natural disaster. As a constructive criticism of "creative reconstruction," we provide possible, multiple paths of disaster reconstruction.

研究分野：文化人類学

キーワード：自然災害 創造的復興 民族誌 復興支援 災害の人類学

1. 研究開始当初の背景

人類学において被災住民の対応・復興過程を中心に研究が蓄積されるようになったのは国内外を問わず、この20年ほどのことである。研究代表者の清水展は1991年に発生したフィリピン・ピナトゥボ火山噴火によって被災した先住民アエタの復興を10年にわたって支援・研究を続け、さらに萌芽研究「防災教育・自然災害復興支援のための地域研究を目指して：コミットメントの経験から」(2007～2008年度)を組織し、この分野の研究を先導するとともに、異なる地域の災害を研究していた研究分担者らと交流を深めてきた。そして現地への長期的な関与を通じて、単なる原状復帰ではない、社会変革的で発展的なものとして復興を捉え直すことが、人類学的な研究の意義であるという認識に至った。

2. 研究の目的

頻発し長期化する自然災害の被害に対して、物理的な被害軽減策に加えて、被災経験を創造的な社会変容の契機へと転じることが求められている。本研究の目的は復興過程についての民族誌的な知見を、そうした転化を支援するために活用する方途を探ることにある。

3. 研究の方法

本研究では、自然災害からの創造的な復興の過程をあとづけ、それを、復興過程に関わる多様なアクターの「コミットメント」(自然災害はその地域を外に対して開き、そこに外部から新たなアクターがやってきて関与する契機となる)、「合意形成」(自然災害は被災後の社会秩序を再編し、それまで社会が抱えていた問題を再構成し、解決へと向かう契機となりうる)、「集合的記憶」(自然災害の経験は被災社会において新たなアイデンティティを創造し、その社会の未来を構想するリソースになりうる)という三つの観点から整理し、さらに社会的な活用が可能な仕方でも提示することを目指す。

このため、適切に対象となる事例を選択したうえで、インテンシブな調査を行うこと、および従来の民族誌の作成にとどまらない提示法の開発が必要になる。こうした課題をクリアするため、本研究では人類学を中心とした災害研究者による学際的な共同研究という形をとり、メンバーそれぞれによる継続的なフィールドワークと、全体的な研究会での議論を組み合わせる形で研究を行った。

4. 研究成果

本研究は、復興過程についての民族誌的な知見を、被災地の人々が被災経験を想像的な社会変容の契機へと転じることが支援するために活用する方途を探るため、人類学者を中心とする学際的な共同研究を通じて、災害頻発地域であるアジア(日本を含む)の長期的

な復興過程に関する統合的・多面的な民族誌的事例研究を行った。

具体的には、清水が発災から20余年となるフィリピン・ピナトゥボ火山噴火被災地において、山本博之が発災から10年となるインド洋津波の被災地であるインドネシアのアチェ、市野澤潤平は同じくタイのプーケットにおいて、復興や記憶、これからの災害への備えなどの点について、今まで継続してきた調査の延長線上で調査を進めた。また、寺田匡宏、重川希志依は、発災から20年となる阪神・淡路大震災の記憶や制度の問題について、寺田は特に記憶の維持と継承に焦点を絞り、重川は被災者の生活再建に関わる制度を中心に、調査を行った。大矢根淳は雲仙普賢岳以降の被災地間での被災経験や復興ノウハウの継承について、木村周平は発災から15年となるトルコ・コジャエリ地震のあとの長期の復興過程について調査を行った。

加えて、研究計画時にはまだ発生していなかった2011年の東日本大震災からの復興も今回の研究テーマに合致しているため、一部研究計画を変更しながら、この災害についての調査を行った。具体的には、重川は宮城県仙台市周辺での「見なし仮設」などの複数の生活再建プロセスについて、大矢根は同じく宮城県の市町村合併によって石巻市に編入された漁村集落における自発的な復興プロセスについて、山下晋司は南三陸町周辺における観光を通じた復興(支援)について、木村は岩手県大船渡市の市街地及び漁村地域における復興プロセスについて、継続的な調査を行い、過去の災害経験がどのように生かされているのか(あるいはいないのか)を調べた。

加えて、大谷順子は本研究の申請時点ではそれほど大きな問題として捉えられていなかったニュージーランド・カンタベリーでの2010年から11年にかけて起きた群発地震後の復興プロセスについての調査を行った。

その成果は、日・英語を中心とした多数の論文や著書などの形で公刊されている。全体として大きく言えば、それは「創造的復興」という概念や、大矢根が「既定復興」と呼ぶ、日本の災害復興の制度の見直しを促している。日本においては歴史的に形成された公的の制度によって、復興の大きな道筋が定められている。それは復興を円滑にしているようで、実際には様々な制約を加えている。本研究ではそのようにある意味で「当たり前」になってしまっている日本の復興の道筋を捉え直し、よりよい、あるいは多様な復興への道筋を示した。

こうした研究成果は「新しい人間と社会の創造」をキーワードとして、2015年度中に公刊予定の清水展・木村周平(編)『新しい人間・新しい社会』京都大学学術出版会においてまとめられる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 63 件)

清水展、「世界の消滅と新生、あるいは災害と先住民の誕生：フィリピン・ピナトゥポ山噴火がもたらしたアエタの経験から」『季刊民族学』138: 89-94, 2011.

Shigekawa Kishie, Satoshi Tanaka, Masanori Takashima, Analysis of Disaster Victims' Decision-Making in the Process of Reconstruction Housing, Journal of Disaster Research 7(2): 127-134, 2011.

重川希志依・田中聡「借上げ仮設住宅供与に関わる自治体の災害対応過程と課題の分析」『東日本大震災特別論文集(地域安全学会)』3: 57-60, 2014.

大矢根淳、「被災へのまなざしの叢生過程をめぐって」『環境社会学研究』18: 96-110, 2012.

大矢根淳、「東日本大震災・現地調査の軌跡・～生活再建・コミュニティ再興の災害社会学の継続・展開(覚書)～」『専修人間科学論集』3(2):

山本博之、「災害対応の地域研究 ポスト・インド洋津波の時代の東南アジア研究の可能性」『東南アジア歴史と文化』41: 105-124, 2012.

Yamashita, Shinji, Tourism and Disaster: Practicing a Public Anthropology of the East Japan Disaster, CDR Quarterly 9: 35-45, 2014.

大谷順子「カンタベリー地震の事例に見るニュージーランドの地震保険と被災地住宅の現状分析」『日本災害復興学会論文集』6: 9-22, 2014.

〔学会発表〕(計 88 件)

寺田匡宏「阪神大震災の記録の継承における問題点と課題」『社会文化学会 第14回全国大会』211年12月11日、東洋大学。

Otani, Junko, Social consequences of Canterbury Earthquake in 2010-11 in New Zealand, The 10th APRU Research symposium on multi-hazards around the Pacific Rim, 2014/11/18-20, Universidad de Chile, Santiago, Chile

Kimura, Shuhei, Visualizing culture?: A collaborative approach to public anthropology after March 11, IUAES, 2014/5/16, 幕張メッセ(千葉県千葉市)

〔図書〕(計 35 件)

清水展『草の根グローバリゼーション』京都大学学術出版会、468頁、2013.

木村周平『震災の公共人類学』世界思想社、288頁、2013.

山下晋司(編)『公共人類学』東京大学出版会、246頁、2014.

木村周平(他編)『災害フィールドワーク論』古今書院、212頁、2014.

寺田匡宏『人は火山に何をみるのか』昭和堂、208頁、2015.

牧紀男・山本博之(編)『国際協力と防災：つくる・よりそう・きたえる』京都大学学術出版会、263頁、2015.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

清水 展 (Shimizu Hiromu)
京都大学・東南アジア研究所・教授
研究者番号：70126086

(2)研究分担者

山本 博之 (Yamamoto Hiroyuki)
京都大学・地域研究統合情報センター・准教授
研究者番号：80334308

重川 希志依 (Shigekawa Kishie)
常葉大学・社会環境学部・教授
研究者番号：10329576

木村 周平 (Kimura Shuhei)
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：10512246

市野澤 潤平 (Ichinosawa Jumpei)
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号：10582661

大矢根 淳 (Oyane Jun)

専修大学・人間科学部・教授
研究者番号：80281319

大谷 順子 (Otani Junko)
大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号：90403930

山下 晋司 (Yamashita Shinji)
帝京平成大学・現代ライフ学部・教授
研究者番号：60117728

寺田 匡宏 (Terada Masahiro)
総合地球環境学研究所・研究部・客員准教授
研究者番号：30399266

(3)連携研究者
なし